チャイルドシート使用の重要性

自動車乗車中の子どもの安全推進合同委員会
服部益治, 川鰭市郎, 伊藤隆一, 澤田雅子, 市川知則, 山中龍宏

《年齢別死因順位（平成25年）》「国民衛生の動向」より

死因	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
総数	悪性新生物 29%	心疾患 20%	肺　炎 10%	脳血管疾患	不慮の事故
0歳	先天奇形等	呼吸障害等	乳児突然死症候群＊	不慮の事故	出血性障害等
1～4	先天奇形等	不慮の事故	悪性新生物	肺　炎	心疾患
5～9	不慮の事故	悪性新生物	肺　炎	心疾患	他の新生物
10～14	悪性新生物	自　殺	不慮の事故	心疾患	脳血管疾患
15～19	自 殺	不慮の事故	悪性新生物	心疾患	他の新生物

「不慮」とは、思いがけない、意外

＊乳児突然死症候群
Sudden infant death syndrome（SIDS）

世界の17歳までの事故死の原因

Distribution of global child injury deaths by cause, 0–17 years, World, 2004

Other unintentional[a] **31.1%**

Road traffic injuries **22.3%** 交通事故死

Drowning **16.8%** 溺死

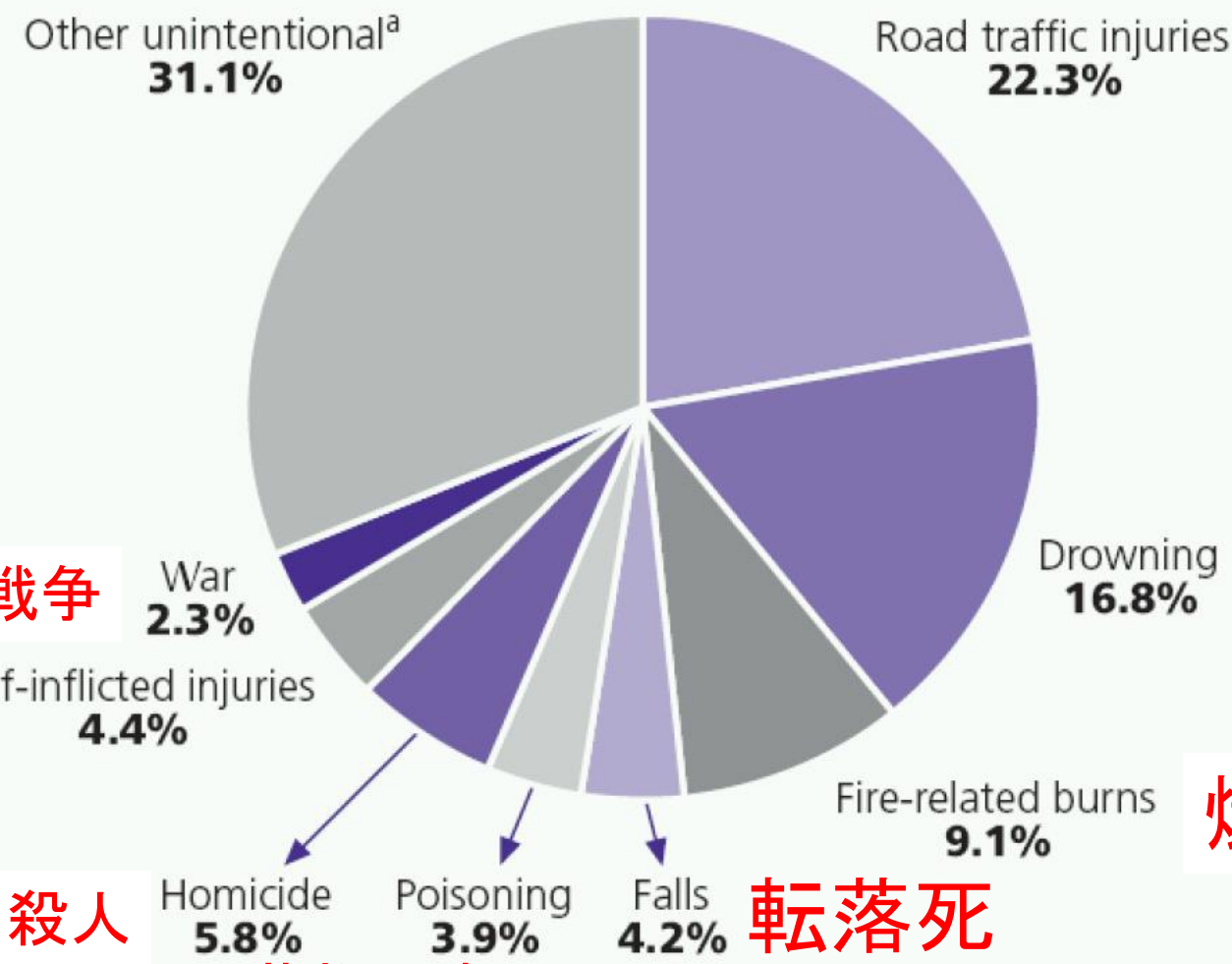
Fire-related burns **9.1%** 焼死（火事）

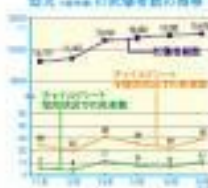
Falls **4.2%** 転落死

Poisoning **3.9%** 薬物中毒死

Homicide **5.8%** 殺人

Self-inflicted injuries **4.4%** 自傷行為

War **2.3%** 戦争

病気で予防に
勝る治療なし

事故対策は
まず『予防』

2000年4月1日施行
自動車の運転者は、チャイルドシートを使用しない6歳未満の幼児を乗車させて自動車を運転してはならない
（道交法第71条の3第4項）

座席ベルト着用義務違反と同様に、免許の取消し等の行政処分の基礎点数が１点付加

但し
罰金なし！

チャイルドシート使用状況調査

チャイルドシート使用状況全国調査2014（警察庁および日本自動車連盟（JAF）より

1 調査目的； 道路交通法におけるチャイルドシート使用義務の対象である6歳未満の子どもについて、チャイルドシートの使用率及び取付け・着座状況を調査、公表することで一層の使用率向上を図るとともに、チャイルドシートの適正な使用を啓発する。

2 調査期間； 平成26年4月20日（日）～4月30日（水）の間

3 調査の種類；

（1）使用状況調査
- ① 調査方法：聞き取り、または目視による確認
- ② 調査対象：自動車に乗車している6歳未満の子ども
- ③ 調査箇所：全国100箇所（調査対象数 12928人・車両台数 10622台）

（2）取付け状況調査
- ① 調査方法：取扱説明書に準拠した取付け状況の確認
- ② 調査対象：自動車に取付けられたチャイルドシート（乳児用・幼児用に限る）
- ③ 調査箇所：全国8地域（北海道、宮城県、東京都、愛知県、大阪府、広島県、香川県、福岡県）計16箇所（調査対象数：413シート）

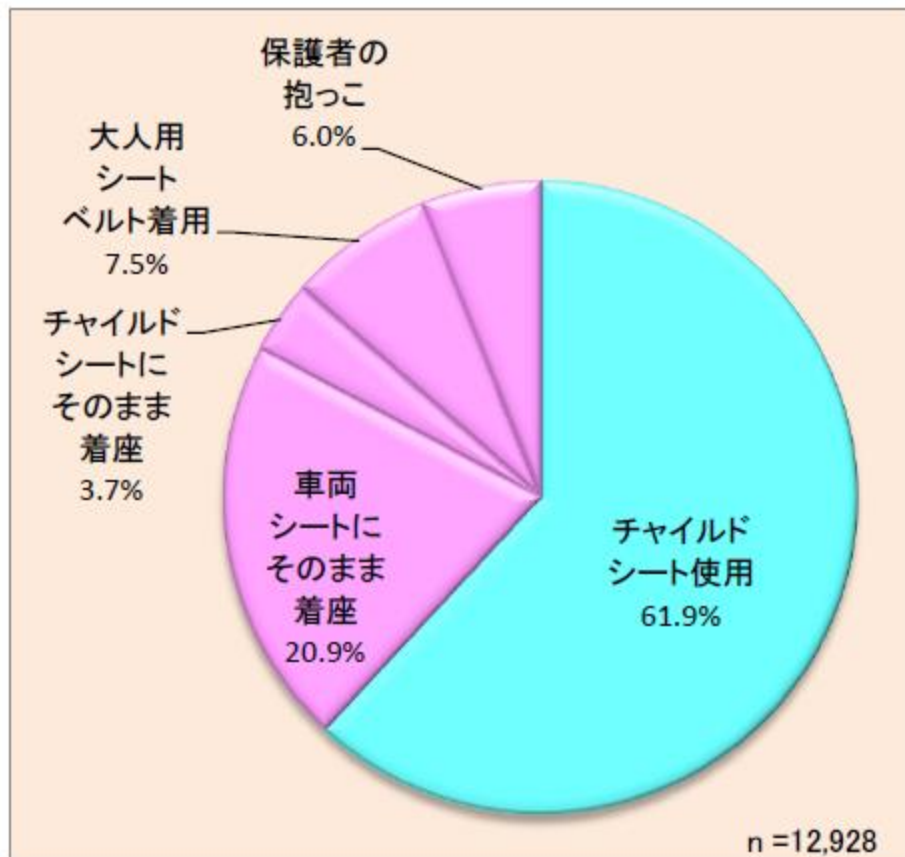
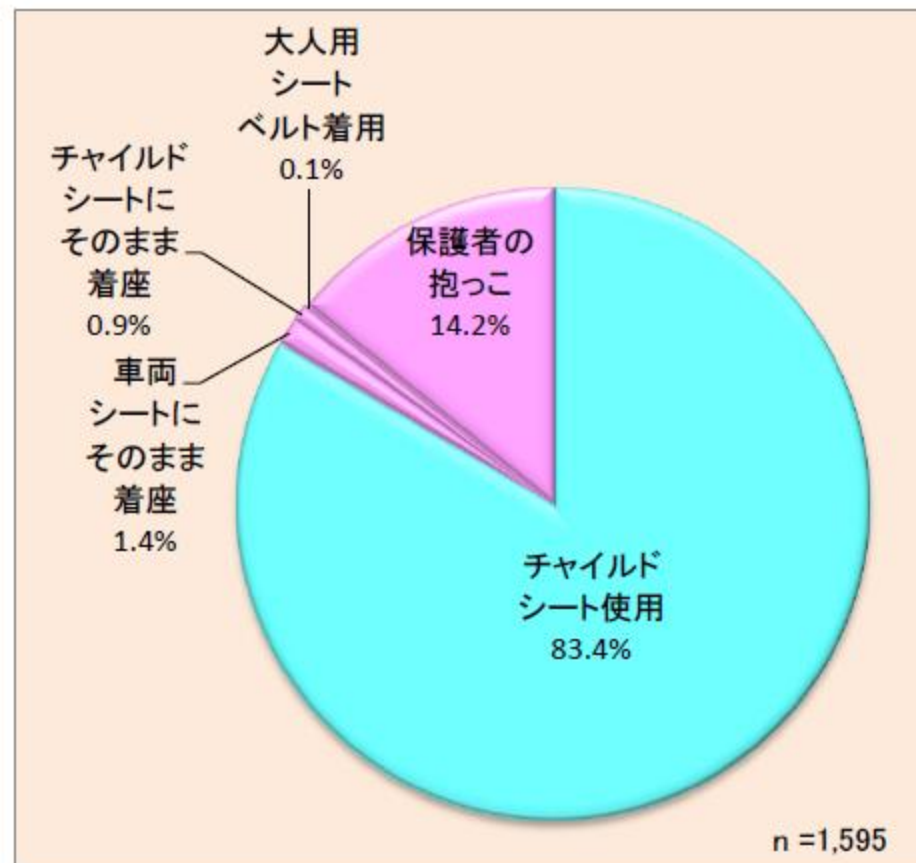
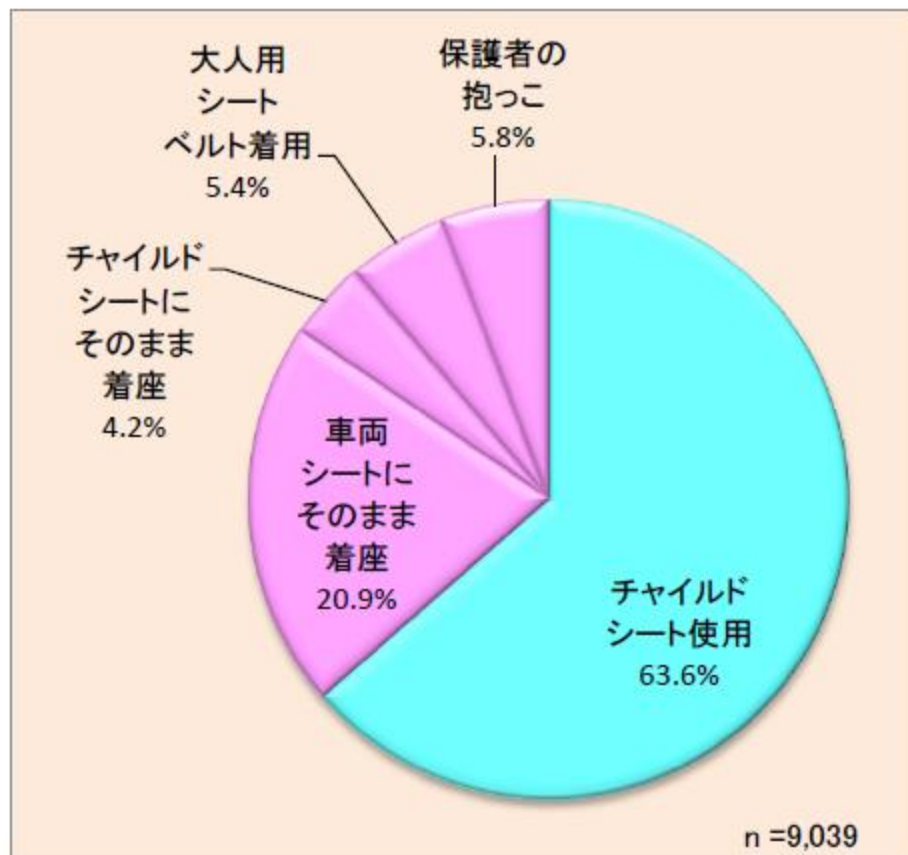
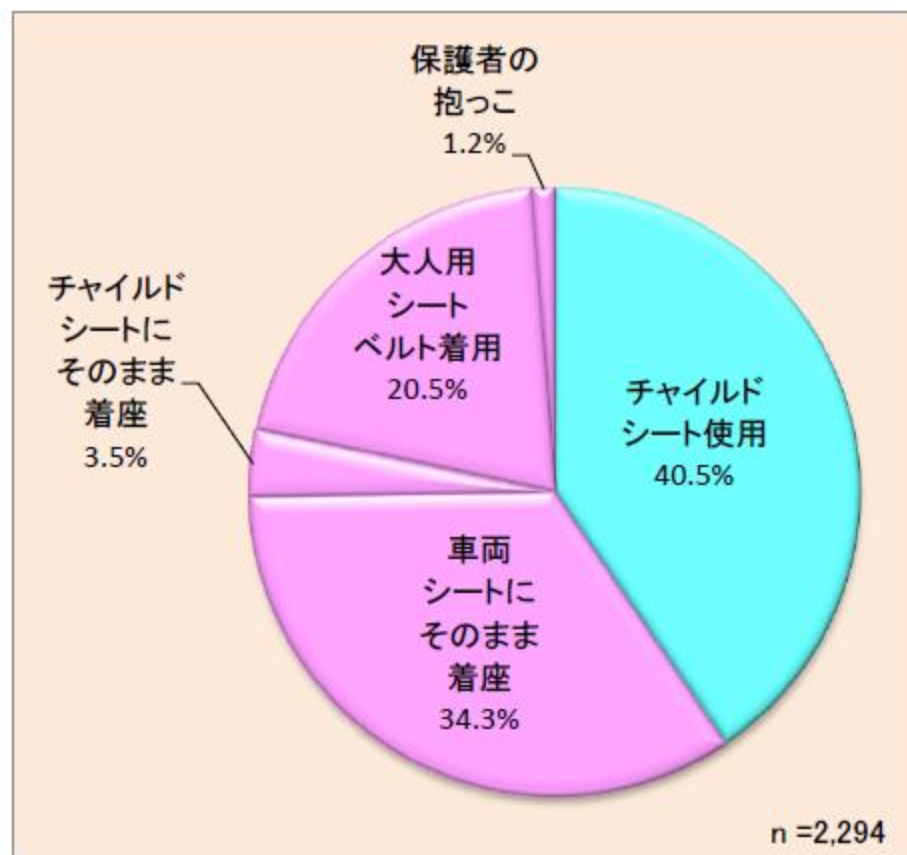
（3）着座状況調査
- ① 調査方法：取扱説明書に準拠した着座状況の確認
- ② 調査対象：自動車内でチャイルドシートを使用している6歳未満児
- ③ 調査箇所：全国8地域（北海道、宮城県、東京都、愛知県、大阪府、広島県、香川県、福岡県）計16箇所（調査対象数：624人）

※上記（2）（3）の調査車両台数は555台である。

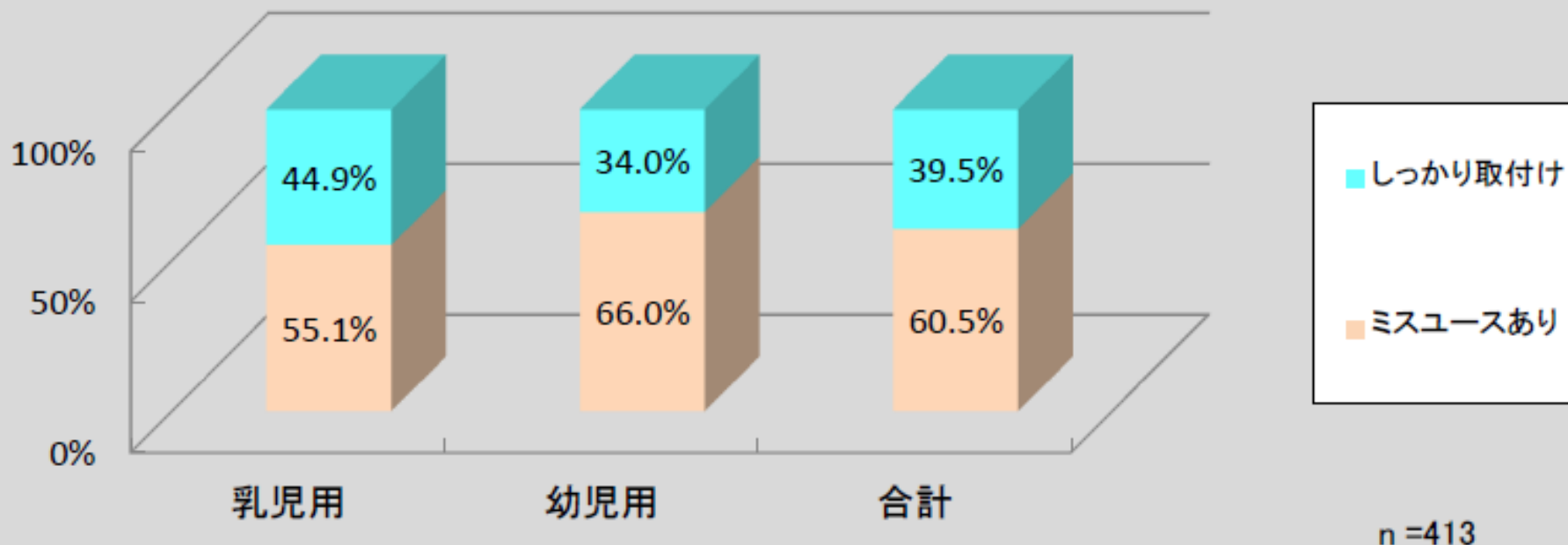
チャイルドシート使用状況調査結果

チャイルドシート使用状況全国調査2014（警察庁および日本自動車連盟（JAF）より

チャイルドシート使用状況調査結果

チャイルドシート使用状況全国調査2014（警察庁および日本自動車連盟（JAF)より

チャイルドシート取付け状況調査結果

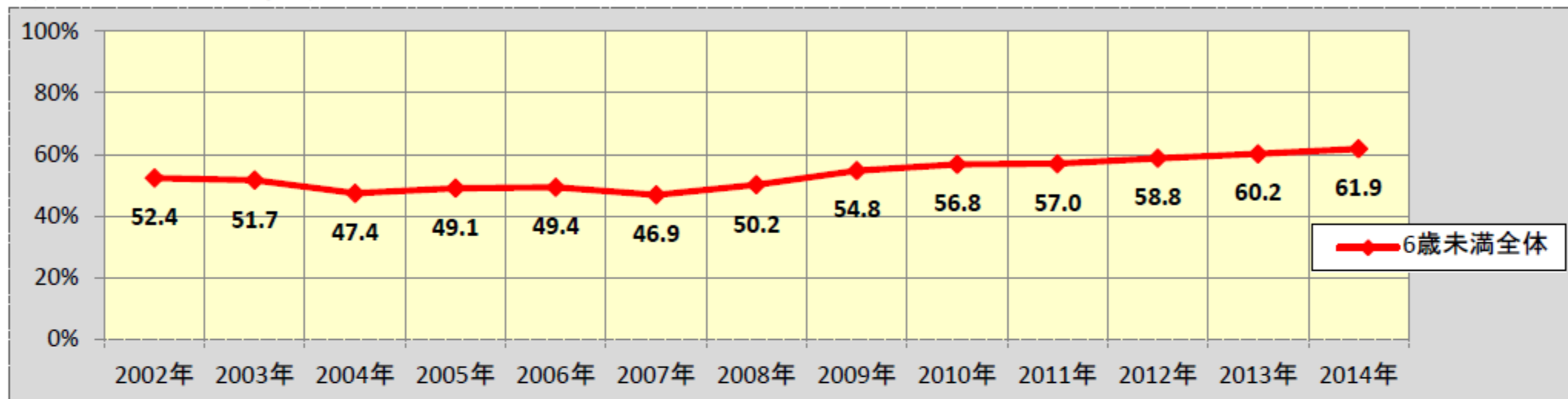
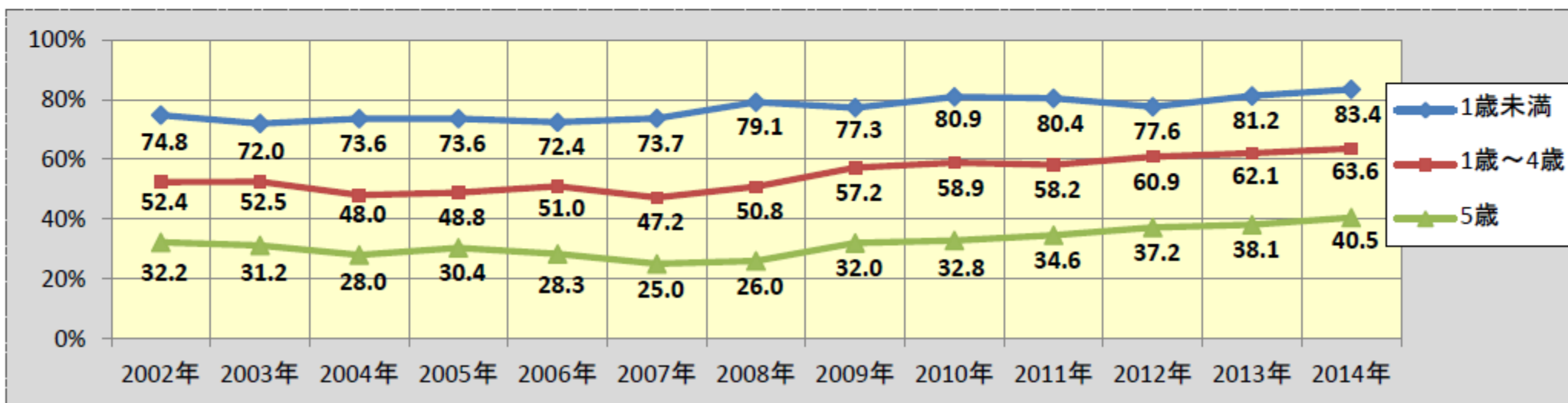
取付け状況調査結果一覧	乳児用		幼児用		合計	
しっかり取付け	93	44.9%	70	34.0%	163	39.5%
ミスユースあり	114	55.1%	136	66.0%	250	60.5%
合　　計	207	100.0%	206	100.0%	413	100.0%

チャイルドシート使用状況全国調査2014（警察庁および日本自動車連盟（JAF)より

チャイルドシートの使用率の経年推移

■使用状況調査結果（使用率の経年推移：6歳未満全体）

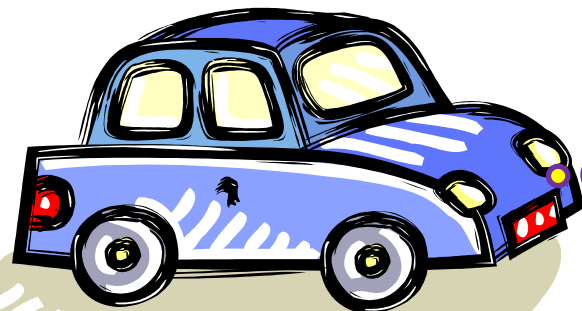
	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
6歳未満全体	52.4	51.7	47.4	49.1	49.4	46.9	50.2	54.8	56.8	57.0	58.8	60.2	61.9

■使用状況調査結果（使用率の経年推移：年齢層別）

	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1歳未満	74.8	72.0	73.6	73.6	72.4	73.7	79.1	77.3	80.9	80.4	77.6	81.2	83.4
1歳～4歳	52.4	52.5	48.0	48.8	51.0	47.2	50.8	57.2	58.9	58.2	60.9	62.1	63.6
5歳	32.2	31.2	28.0	30.4	28.3	25.0	26.0	32.0	32.8	34.6	37.2	38.1	40.5

こどもの事故予防体験ひろば
【兵庫県姫路市中央保健センター１階】

こどもの視野体験コーナー

車内で子どもが
危険な目にあったことがある

YES：1389/10000

3位 パワーウインドウに
手・足や首を挟まれた 9.7%

4位 車がぶつかった反動で、
ケガをした 3.2%

5位 車のドアが開いて、
車外に転落した 1.8%

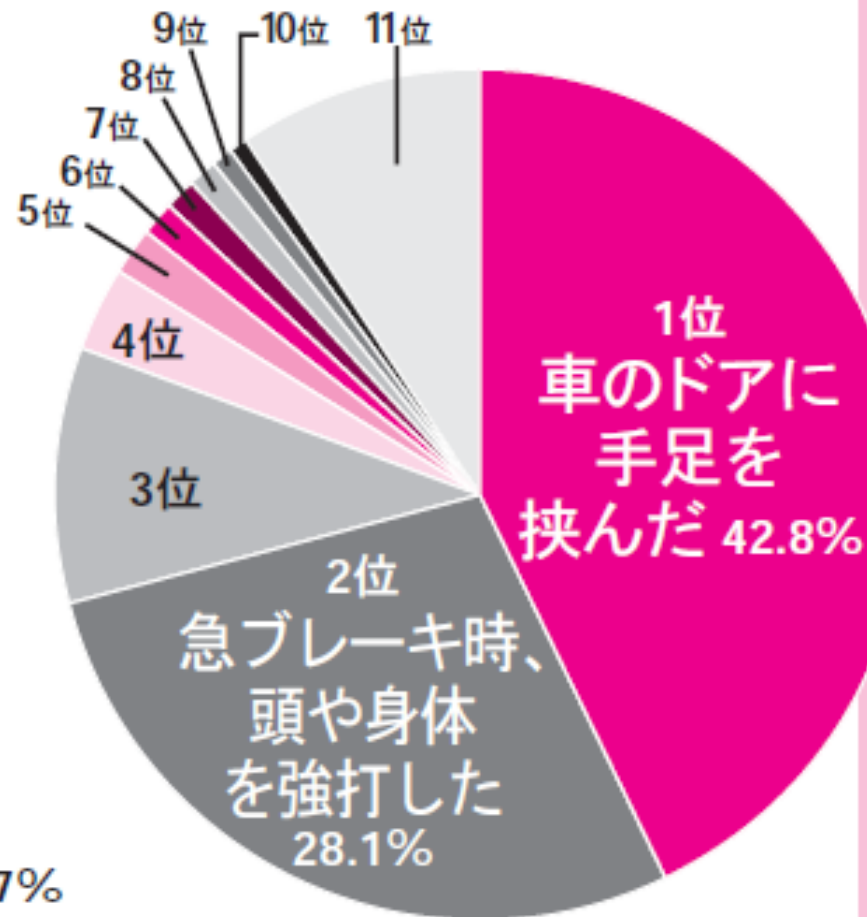
6位 車への乗せ降し時に
頭をぶつけた 1.3%

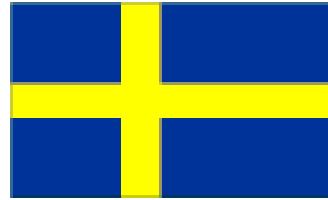
7位 チャイルドシートごと、
外れて転落した 1.2%

8位 日光で熱くなった
金具でヤケドした 1.1%

9位 シガーライターを
悪戯してヤケドした 0.8%

10位 熱中症・脱水症状になった 0.7%

11位 その他（食べ物をのどに
詰まらせた）9.3%

経験有り13.9% 1389人

（日本自動車連盟(JAF)
一万人アンケート調査、
2002年）

「**就学前の子ども**には、交通事故を避けるために必要な状況を判断する**認知能力はない**」

「子どもを交通事故から守るには、子どもを**交通安全教育**により交通状況に合わせさせるだけではなく、子どもが交通事故に遭わずにすむ交通環境を作るそして例え発生しても、軽症化する」対策を！

1 乳児用シート

2 幼児用シート

3 学童用シート

助手席で抱っこした場合

❸ 急ブレーキをかけた時に、抱っこしている子どもがクルマのダッシュボードに頭部などをぶつけ、けがをしてしまいます。また窓ガラスから車外に放り出される危険性もあります。

後部座席で抱っこした場合

❹ 衝突によって、子どもが前の運転席あるいは助手席に激突してしまいます。また❸と同様に窓ガラスから車外に放り出される可能性もあります。実際に後部座席で抱っこされていた幼児が車外に放り出され、死亡するという交通事故もありました。

大人のシートベルトを使用した場合

❶ 身長140cm以下の子どもがシートベルトをそのまま使用すると、からだをきちんと固定できないため、クルマの追突時の衝撃でベルトからからだがすり抜けて、頭などを激突し、けがをしてしまいます。

❷ ❶と同じく身長140 cm以下の子どもは肩ベルト、腰ベルトでからだをきちんと固定できないため、クルマの追突時には下半身はもとよりからだ全体がずり下がり、ベルトによって頸部を圧迫する可能性もあります。

2008年4月　日本産科婦人科学会

産婦人科医師向けの「産婦人科診療ガイドライン−産科編2008」

妊婦のシートベルト装着を推奨

2008年(平成20年)4月12日(土)　毎日新聞　第47510

知りたい!

妊婦のシートベルト　しない方が危ないんです

おなかの赤ちゃん守ってね

日本の着用率低く

妊婦のシートベルト着用法

ベルトを肩と腰に固定する

おなかの下を通すの

シートベルトを着用せずに車に乗る妊婦を時折見かける。窮屈に感じるうえ、おなかの赤ちゃんへの悪影響を心配するためだ。妊娠や肥満、けがなど「健康保持上の理由」がある場合、道交法違反にはならないが、研究者らは「しなくてもいいというのは誤解。着用してほしい」と呼びかける。春の全国交通安全運動は15日まで。【酒井祥宏】

「おなかを圧迫すると思った」。宇都宮市で昨年7月、妊娠21週を迎えた主婦、上田淳子さん(23)は夫峻也さん(20)運転の乗用車でスーパーに買い物に出かけた。おなか回りは約80㌢。知人から「必要ない」と聞いていたため、シートベルトをせず助手席に乗った。

交差点を右折中、対向車線を直進してきたワンボックス車と衝突。上田さんはダッシュボードの下でおなかを抱えうずくまったまま気を失った。左気胸など重傷を負ったが、胎児は無事だった。済生会宇都宮病院の飯田俊彦産婦人科医長は「胎児、子宮に影響がなかった。奇跡です」と驚く。

同12月、3105㌘の男の子を無事出産。上田さんは「よく生きていたと思う。妊婦には着用を呼びかけたい」と話す。

妊婦の安全とシートベルトの関係を研究してきた独協医大の一杉正仁准教授(法医学)は「正しく着用すれば胎児への影響を軽減できる」と断言する。昨年、妊婦のダミー人形のおなかに3㍑の水を入れ、妊娠30週の妊婦が運転中に時速30㌔で追突された場合に受ける衝撃を測定した。シートベルトを着用していれば、おなかへの衝撃を未着用時の3分の1に軽減できることが判明した。

また妊娠30週の妊婦20人に運転席に座ってもらい、おなかとハンドルの間隔を測ると平均14・5㌢だった。妊娠していない人と比べ約10㌢ハンドルに近いが、人形を利用した追突実験で、シートベルトを着用していれば衝突時にハンドルとおなかの間にすき間ができることが確認された。

着用が義務づけられている米国では、妊婦の着用率は8割以上で、英国でも7割超。一方、別の研究者が94年に実施した調査では日本での着用率は32%と低い。多くの妊婦が「法的義務がないから」と回答したという。

妊婦がシートベルトを嫌う理由の一つはおなかへの圧迫感だ。一杉准教授によると、ベルトを肩と腰に固定し、腰回りのベルトを大きくなったおなかの下に通せば解消される。日本産科婦人科学会と産婦人科医会も、近く「産科医療に関するガイドライン」で同様の着用方法を呼びかける。

警察庁は今のところ、妊婦の着用義務を除外する道交法の規定を見直す予定はないが、「海外の事例を調査し、専門家の見解を踏まえて着用の広報啓発を検討したい」としている。一杉准教授は「本人の注意だけで事故を防ぐのは難しい。妊婦と胎児を守るために、シートベルトを正しく着用すべきだ」と指摘する。